

## 山の神と化粧木(その1)

東日本高速道路(株)技術部次長 阿部公一

## 山の神に祈る坑口付け

ビルなどの建築物の工事開始にあたっては、一般に、その土地にいると思われる土地の神を祀り鎮める神事・地鎮祭を執り行う。土地の神は荒ぶる荒神であると考えられていて、これを鎮めるには供物を供えてその御心を安らかにするのがよいとされる。

トンネル掘削の開始にあたっては、山の神に工事の安全を祈る神事を行う。この神事は、一般に「坑口付け」と呼ばれ、かつては、トンネル掘削をする作業員を取りまとめる棟梁が神事を執り行い、これから掘削しようとする山に鎮留する山の神に、これからトンネルを穿つことを申し述べ、その間の工事安全を静かに祈った。工事に直接携わる人々のいわゆる身内の式であり、神主を招くことはない。しかし、最近ではゼネコン(元請け)が主催する安全祈願祭と並行することが多くなり、祭司を神主に依頼することが多くなった。そのとき、祀る神は国土の守護神である大地主神と、その地域の神様である産土神、またその土地の神々である「此の地を宇志波伎坐大神」などである。宇志波伎坐とは、主人として一定の場所を領有することをいい、まさに神主が祭司する安全祈願祭でも、山の神に向かって祈っているに違いない。

アンケート回答者の大部分も、元請けのゼネコンが主催する安全祈願祭で祭司が神主であろうが、安全祈願する神は「山の神」と意識している。とはいえ、トンネル掘削の安全祈願をする

「坑口付け」がゼネコン(元請け)が主催する工事全体の安全祈願祭と並行することが多くなり、前者の祈り対象である「山の神」と後者の神主が招く神々との区別が曖昧になっているようにも感じられる。

## 坑口付けの手順・所作・神事の準備

トンネルを掘削し始めるには、いわゆる「坑口付け」を行う。坑口付けというのは、坑口の切り取り、根掘り、支保工建て込み、矢板掛け、埋戻し、土嚢積み、化粧木の設置、安全祈願までの一連の作業を指す。

坑口付けでは、一般に、地山の外側に数基の支保工を建て込み、この支保坑は坑内の支保工である「本枠」に対して「捨て枠」と呼ばれる。そして、もっとも外側の捨て枠2基に「ころがし」を設置し、さらにこの「ころがし」の上に化粧木が置かれる。こうした化粧木が載る外側の2基の捨て枠は「化粧枠」とも呼ばれる。

坑口付けの神事には、「捨て枠」のうち奥の2基に山の神が鎮座しているのので、そこに祭壇を設け供物や工事に使う工具を供えともいう。

「坑口付け」は、工事に携わる人々にとって自然の力を畏怖しつつ困難な工事に立ち向かう気持ちを奮い立たせる実に内面的で敬虔な行事である。

## 神事の所作と供物

坑口付けの神事の中心は清めと祈りである。坑口付けの神事はトンネル坑夫の棟梁が祭司を務めて、山の神に工事の安全を祈願することは前述し

たが、祭司によって、神事の所作はさまざまで定めはない。

長く坑夫の棟梁を務めた者の証言によれば、坑口をきれいに清掃したうえで、まず祭司は四方を塩で清め、次に支保工の根元にお神酒をかけてトンネル内を清め、さらに四方に酒をかける。清めを行った後、全員で二礼・二拍手・一拝して山の神に安全を祈願し、最後に御神酒を戴くという。

トンネルの清めには、塩や米、お酒が用いられる。塩は人間の生命を維持する食べ物の根源の一つで、食べ物の具体的なシンボルであると同時に、塩には塩そのものがもつ霊力があると信じられてきた。一方の酒は穀霊のシンボルである。酒を飲むと普段と違った至福の状態になれる。神に酒を供えたり、これから掘削にかかる山に向けて酒を振りかけるのは、神に心地よくお酒を飲んでもらって心安らくなっていただくためだろうか。

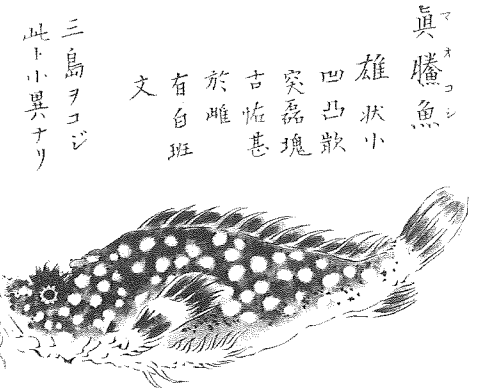
## 山の神への供物

山で仕事する人々の儀礼・習俗の中に、醜魚であるオコゼを供物として山の神に捧げる儀式がある。オコゼは海のオニオコゼで醜い顔をしている。

供物にオコゼを捧げるのは、「山の神は自分より醜いものがあるのを喜ぶから」とか、「オコゼは山の神の妻、あるいは家来である」からという。

トンネルの「坑口付け」にオコゼを供えるという習俗は一般的ではなさそうだ。ただし、一部のベテラン工事従事者から、供物として酒・塩・米のほかに、「田作り」を供えとの証言がある。田作りとは、ごまめ(カタクチイワシの乾製品)のことで、田植えの祝儀肴として用いられたのでこの呼び名があり、いずれも山の神の好物であるオコゼから転じたのではと想像されるが、ここではこれ以上憶測するのは避ける。

山の神は酒・米・するめが好物で、トンネル作業者は、これら好物を掘削面に投げ入れた後、その場を立ち去って、絶対に振り返ってはならないというしきたりがあったという。なぜなら、山の神は醜い顔をして食べているところを絶対に見ら

図-2 山の神が好むオコゼ<sup>1)</sup>

れたくないからという。この話の真偽のほどは不明ながら、山の神への供物について、無視しえない示唆的な内容である。

## 炭鉱の「芝はぐり」

先に炭鉱で働く坑夫が信じる「山の神」とトンネル工事従事者の「山の神」の連続性を指摘したが、炭鉱の坑口付けの事例を振り返ってみたい。

自然界に手を施す場合、昔から神に許しを得る手続きとしてさまざまな儀礼を行ってきたが、炭鉱でも山肌に坑口を切り開くときには、「芝はぐり」と呼ばれる「坑口開け」の儀礼を行ったという。

森崎和江は、明治40年代前半の大資本による採炭が行われていたころと断りながら、「草ばかりの山の中で、おみきをあげてから木を切り、山に入口を何間幅かあけた。人が通れるくらい。それから鏡枠(坑口の化粧枠)をいれて、二・三間ばかり掘ってから神主さんが来て、お祓いした」と、「芝はぐり」の様子を語った証言を紹介している<sup>2)</sup>。

炭鉱にても坑口を開けるに際し神事を行ったが、大資本が開発するそこには、もはや山の神に祈る敬虔さは薄れていた。

## 参考文献

- 1) 柳田国男：山の神とヲコゼ、柳田国男全集8、講談社。
- 2) 森崎和江：奈落の神々 炭坑労働精神史、平凡社、1996.7。